

江戸時代の商家や廻船問屋が並ぶ町並みで、のんびり魅力発見



美々津港



立縫の里
神武天皇は急な出発の前に、着物のほころびに気付きます。慌ただしい中、繕うゆとりはありませんでしたので、お付きの者が立ったままほころびを縫ったと伝えられ、「立縫」と言う地名が残っています。



旧共同井戸

ツキヌケ
町を延焼から守るために区画整理して造られた防火用の通りです。江戸時代に設けられたものと伝えられています。



日本海軍発祥之地碑

日向灘



神武天皇御腰掛岩



町並みの石だたみ



立磐神社



美々津軒



町並みセンター



日向市歴史民俗資料館

神武天皇御腰掛岩
神武天皇が腰掛けたとされる岩がご神体として祀られています。

之地
日本海軍発祥



備前屋



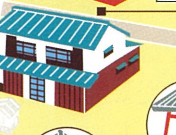
和カフェ
たまの屋



美々津軒



お休み処
美々津まちなみセンター



旧共同井戸



旧共同井戸



旧矢野家



旧ときわ旅館



旧美々津郵便局



旧共同井戸



江戸時代に設置された簡易な関所があった場所です。

旧大木戸



駐車場 トイレ

耳川

10
美々津大橋



立磐神社

御腰掛岩

軽貨&カフェ
民



居酒屋
ひなた屋



高札場



幕府や藩が民衆に直接伝達する手段として用いられた立札です。



正覚寺



愛宕神社



橋口氏庭園



八坂神社
(神武天皇御宮跡)



新町



大型バス可



美々津町歩き

宮崎県日向市
国選定重要伝統的建造物群保存地区

神武天皇御宮跡
神武天皇がお舟出まで住まされたといわれています。そのために掘られた「神ノ井」と呼ばれる井戸があり、社(やしろ)の手前には磐座(イワクラ)も祀られています。



おきよ祭り
旧暦8月1日の未明、子供たちが短冊を付けた笹竹を振りながら「起きよ、起きよ」と人々を起こして回る神武天皇お舟出の朝を再現したお祭りです。



案内図

神話伝説と廻船問屋の繁栄の歴史

美々津の歴史

美々津は古くから海の交易の拠点として歴史を刻み、町の背後にある遺跡からは、畿内、瀬戸内様式の弥生土器が出土しています。このことから、美々津が相当古い時代から該地と交流があったことを裏付けています。

美々津が、港町として成立するのは江戸時代初期の元禄の頃(1688～1703)からで、当時は高鍋藩領に属し、藩主秋月氏の支配の下、重要な港町となっていました。港近くには津口番所や藩蔵が建てられ、対岸の幸脇地区や上流の余瀬地区にも番所が置かれ、城下から代官や蔵役、番人などが派遣されていました。

美々津を経済の面から支えていたのは、千石船を所有する廻船業者たちで、彼らは、備後屋、明石屋、播磨屋、泉屋などと言った瀬戸内や畿内の地名を屋号とし、耳川上流で生産された材木や木炭などを大阪方面に向け出荷していました。その帰路、関西方面の特産品や美術工芸品を持ち帰ることが多く、地域と文化交流の担い手としての一面も有していました。彼らの活躍が、やがて明治から大正時代にかけて「美々津千軒」と言われるほどの繁栄をもたらすことになります。

しかし、潮や風の影響を受けやすい帆船を使った古い航海方法に頼りきっていたことや、経営そのものが江戸時代の旧態から脱しきれていなかったこともあり、大正12年の国鉄日豊本線開通を契機に廻船業は衰退していくこととなりました。主幹産業を失った美々津は、近郊の商業地域としての命脈は保ってきましたが、高度成長期における諸産業の飛躍などに伴い、現在では小さな港町となっています。

神武東征物語

美々津は、日向神話「神武東征説神話お舟出の地」として知られています。神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイワレヒコノミコト)、のちの初代・神武天皇は「ここは国を治めるには西へ寄りすぎている。東方に青山をめぐらした美しい国があって、すでに饒速日命(ニギハヤヒノミコト)という者が国を拓きつつあるとか。そこへ行って、まつりごとをするにふさわしい都をつくりましょう。のちの日本書紀にも描かれる「神武東征」。歴史の基礎は、日向市美々津の港から始まりました。

お舟出は、旧暦の8月2日の予定でしたが風の都合で舟出が急きよ変更になり、あわてた人々はお祝いに用意していた材料を全部一緒に搗(つ)いて急ごしらえの団子を作り、天皇に差し上げました。そのときの「つきいれ団子」(お船出だんご)は今も美々津の名物となっています。

早朝のお見送りのため寝人っている各家の戸をたたき、「おきよ」「おきよ」(起きよ、起きよ)と人々を起こして廻りました。

この故事にちなみ、旧暦8月1日には「おきよ祭り」が行われます。

